Japan Society of Obstetrics and Gynecology

P2-27-4　福井県の子宮頸がん検診に細胞診とHPV検査の同時併用法を導入した第一報―細胞診陰性でHPV検査陽性者に着眼した取り組み―

福井大
黒川哲司，品川明子，知野陽子，吉田好雄

【目的】子宮頸がん検診に，これまでの細胞診検査に加えHPV検査を導入することの有効性を検証する幾つかの研究が実施されてきた．しかし，国際的に定まった実施方法はなく，日本でもHPV検査の有効性や実施方法について検討を行うことが急務とされている．そこで本研究の目的は，HPV検査導入の有効性を検証することである．本研究の特徴は，これまで日本で行われていない，細胞診検査陰性（NILM）でHPV検査陽性者に精密検査を行うことである．【方法】本試験は，2015年度に住民検診に参加する25～69歳の全員を対象とし，細胞診検査とHPV検査を同時に施行する前向き試験である．試験デザインは，細胞診陰性でHPV検査陽性者に対し，コルポスコピーと生検を施行する横断的研究と，その後3年間追跡する縦断的研究の2組で構成されている．今回は，横断的研究の中間報告を行う．本研究は倫理委員会の承認を得ている．【成績】2015年4月1日から8月31日までの登録者は，対象4406名中で同意が得られた2511名．同意者内のHPV陽性率は7.2%．年齢別陽性率は，若年層（25～29歳）で19.7%，高齢層（65-69歳）で2.5%と約8倍の差を認めた．型別頻度は，16型が20.2%，18型が7.4%，その他の危険群が82.2%．HPV陽性者内の細胞診陰性者は120名（67%）であり，その内，精密検査に受診した30名の生検結果は，異形成なしが20例，CIN1が6例，CIN3が4例であった．この4例中2例が16型陽性であった．【結論】細胞診だけでは発見されなかった治療対象の前がん病変が，HPV検査を導入することで4例見つけられた．それ故に，福井県においてHPV検査導入は，前がん病変の感度向上に寄与すると考えられた．

P2-27-5　子宮頸部上皮内腫瘍の予後因子としてのHPV感染およびその型別の臨床的解析

豊見城中央病院
土井生子，小林剛大，當眞真希子，上地秀昭，神山和也，前濱俊之

【目的】子宮頸部上皮内腫瘍（CIN）の経時的変化とその予後因子の解明はCINの管理おいて重要であり，なかでもHPV感染は重要な役割を演じていることが知られている．したがってCINの予後とHPV感染・型別診断との関連性を分析した．【方法】対象は2006年5月より2014年12月までに当科で診断されたCIN症例1250例である．細胞診異常症例またはHPV陽性例に対し，コルポ診と組織診を施行し，CIN1，2，3の診断を行った．CIN1，2においては3-6か月毎に細胞診，コルポ診，組織診，HPV検査，型別を行い，その経時的変化（退縮，持続，進行）を解析した．さらにHPV検出，型同定検査においては十分なICを行った．【成績】CIN1：558例，CIN2：237例，CIN3：455例が組織診により診断された．CIN1の退縮率は28.9%，CIN2では29.0%であり同等であった．しかし，CIN1+2におけるHPV陰性例での退縮率は37.0%であり，HPV陽性例の24.3%に比し有意に高く，進行率はHPV陽性例（19.7%）がHPV陰性例（9.5%）に比し有意に高かった．また，CIN1+2におけるHPV型別では高リスク群の進行率は26.3%であり，中+低リスク群の10.0%に対して有意に高く，退縮率では高リスク群が19.5%であり，中+低リスク群の31.3%に対して有意に低かった．【結論】CIN1，2の臨床的解析によりHPV感染と型別が退縮，進行に密接に関与していることが示された．したがって，CINの管理においては従来の細胞診，コルポ診，組織診に加えて，HPV検索が非常に有用であると考えられた．

P2-27-6　子宮頸部細胞診におけるASC-US症例の臨床的検討

愛知医大
松下　宏，藤井沙希，森井裕子，大山由里子，藪下廣光，若槻明彦

【目的】ベセスダシステム報告様式による子宮頸部細胞診のASC-US（Atypical squamous cells of undetermined significance）症例では，ハイリスクHPV（HR-HPV）検査の施行が推奨されており，その約半数でHR－HPVが検出され，約10-20%で高度上皮内病変が潜在するとされる．今回われわれは，子宮頸部細胞診にてASC-USと判定され，HR-HPV検査を施行した症例について，その陽性群，陰性群の臨床的背景と転帰について検討した．【方法】子宮頸部細胞診にてASC-USと判定され，2012年1月から2015年6月に当院において，後日採取によりHR-HPV検査を施行した203名（42.2±11.8歳，平均±標準偏差）を対象とした．HR-HPV検査の結果により陽性群，陰性群に分類し，その臨床的背景，転帰について後方視的に検討した．【成績】(1) HR－HPV陽性は67名（33.0%），陰性は48名（67.0%）であった．(2) 陽性群は陰性群と比較し有意に若年であった（38.7±12.3 vs. 43.9±11.1歳，$p<0.005$）．(3) HR-HPV陽性群のうち閉経後女性は6名（8.9%），陰性群では26名（19.1%）であり，両群間で有意差が認められた（$p<0.05$）．(4) HR－HPV陽性67名中52名で組織生検が施行され，15名（28.8%）では異形成の所見は認められなかったが，26名（50.0%）が軽度異形成，11名（21.1%）が中等度異形成と診断された．高度異形成以上と診断され，治療を要した症例はなかった．【結論】子宮頸部細胞診においてASC-US症例のHR-HPVの陽性率は1/3であった．陽性群は有意に若年でありその性的活動性が，陰性群では閉経後女性が高率でありそのエストロゲン不足が，ASC-USの判定に影響している可能性が示唆された．

NII-Electronic Library Service